オーストラリアガーデン事情

二宮　孝嗣(本学非常勤講師)

毎年オーストラリアで開かれるメルボルンフラワーアンドガーデンショーに今年も審査員をかねてオーストラリア人のガーデンデザイナーの庭作りに参加してきました。フラワーショーの会場はメルボルン市内のカールトン公園でガーデン部門と、世界文化遺産になっているカールトンホールでフラワーアレンジ部門との二つの部門でおこなわれます。水曜日から日曜日までの5日間で12万人近くの人が花と庭の競演を楽しみにやってきます。

そもそもメルボルンは19世紀始めにタスマニア島に最初に移住したイギリス人たちが市内を流れるヤラ川に沿って入植し、19世紀半ばになって金が見つかりゴールドラッシュとともにオーストラリアの経済の中心地として急激に発展しました。今もその名残りで裕福な人が多く住んでいてヤラ川の丘陵地帯にはすてきな住宅が多く建ち並んでいます。ちなみにフルーティーな香りで有名なオーストラリアワインの多くのワイナリーはこの川の上流地帯にあります。

フラワーショーが開かれるカールトンホールはビクトリア州最初の州議会が開かれたところで、20世紀初頭にイギリスから独立してキャンベラを首都とするまで、オーストラリアの経済と政治の中心地となってきました。そんな由緒ある公園で開かれるメルボルンフラワーアンドガーデンショーはニュージーランドで開かれるエラズリーフラワーショーとともに南半球のガーデニングを引っ張ってきました。

世界中のすべてのフラワーショーがイギリスのチェルシーフラワー

ショーを目指して頑張っていますが、メルボルンフラワーショーも同様イギリスの影響を強く受けています。ただスポンサーが植木、造園協会とともに切り花生産協会もスポンサーになっているのでフラワーアレンジメントの質の高さは特筆すべきものがあります。

ガーデン部門ではオーストラリア独特の植物を多く使うとともにオーストラリア人独特のオープンキッチンともいうべきバーベキュウコーナーを持つものも多く見られます。チェルシーフラワーショーに比べるとハードランドスケープ（構築物やレンガ、ペービング）に重点をおくものが多く、植物とのハーモニーが程よいチェルシーフラワーショーに比べるとちょっと物足りないかもしれません。

色使いも私には少し原色系によっているような気がしますが温暖化によって無霜地帯になってきた東京ではチェルシーで使われているようなパステル調の色彩を持つ梅雨や暑い夏に弱い宿根草類よりも参考になるものも多いと思われます。

メルボルンのオープンガーデンも毎年行われるようになってきて数百の庭がエントリーされ、季節ごとに庭好きの人々の目を十分楽しませてくれています。またガーデンオーナーの心からのホスピタビリティーもうれしいかぎりです。今回お邪魔したフリッパさんのお庭もすてきなダイニングから眺める庭がどこかのハウスマガジンからそのままでてきそうな開放的で明るい室内でした。庭談義に話が弾む中、パティオでコーヒーをいただきながらとても贅沢な時間を過ごさせていただきました。

メルボルンフラワーアンドガーデンショーが開かれる4月は南半球では夏の終わりなので一部の落葉樹は紅葉が始まっていて花の少ない季節なのですが、それでも十分楽しむことができたので、次回はぜひ10月（メルボルンの春）にまた訪れたいと思いました。

また、オーストラリアでも量販店による価格破壊？が進み、小さなナーセリーは次々に店を閉めて、メルボルンに一時は20以上あったバラの専門店も今では4軒になってしまったとあるバラ専門店のオーナーは嘆いていました。でもここ2～3年は専門店にまたお客様がかえってきて徐々に

ではあるが売り上げも伸びてきているといっていました。ちなみにオーストリアでは今までは白いバラが丈夫で作りやすい面もあってよく売れていましたが最近は赤のはっきりした色のMr.リンカーンやパパメイアンなど、懐かしい品種の売れ行きが好調だとのことです。

今回オーストラリアをフラワーショーも含めていろいろ見させていただきましたが、庭というものがやはりその土地その土地の生活と気候にあったものなのだということをつくづく思わされました。今後日本の庭事情も日本人の生活のますますの洋風化に伴って西洋的要素が多く取り入れられるようになってくると思います。そんな中で女性のガーデンデザイナーの社会的要求が高まってくるものと思われます。